うちのビーチェが一番可愛い！

赤き真実で宣言マン

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

六軒島に愛人がいるってマジ？これもう調べるしかねぇな……（使命感）

目次

プロローグ ―― 1
第一話 ―― 4

プロローグ

籠の中の鳥は幸せでした。籠の中は快適で、不自由はないように思われたのです。

しかし籠の中の鳥は思います。この籠の外に出れたなら、どんな景色が見えるのだろうか、この籠の外にはどんな事があるのだろう……と。

それはとても甘くて危険な誘惑。

けれども彼女は願い続けます。きっと一目見れればそれだけで自分の中の総てが満たされる、そんな気がしてなりませんでした。

だから彼女は――父から『ベアトリーチェ』と名付けられた少女は居るかも分からない神様に願い続けるのです。「願わくば自分を連れて行ってくれる絵本のような王子様が現れますように」と。叶うことがないと知っていながら、自分の世界がこの小さな屋敷で完結してしまうことを恐れて。

これはそんな彼女が籠の中から飛び立つ物語。

１９６２年３月、俺を養ってくれていた爺さまが天に召された。享年は確か７８で大

往生だったらしい。死の間際まで俺に自分の知識の全てを教えようとしてくれていて、爺さまが倒れたのも俺に授業をしている最中だった。経営者として必要なことや欧米式の経営戦略、果ては自分の有しているコネクションまでもを俺に引き継ぎ最期には『自由に生きろ』と遺言を遺し、死んでしまった。俺は未だに未成年であり、後見人として爺さまと縁があったという右代宮家当主の金蔵氏が後見人となってくれたため法律的な不便はなくなったと言っていい。しかし、爺さまの残した遺産は土地や大企業や将来性のある企業の株式、国債などが丸っと手元に残り生活する上で不便は無いと思う。まぁ遺産が無くても自分の会社があるし実際何とかなるんだよなぁ。

だが、問題がないとも言えない状況であり、当面の問題は――

「君の義父上には世話になった大恩がある。よければ家で成人するまででもいいから住んでみないかね？なに心配は無用、自分の家だと思って寛いでくれていい」

そんな風に後見人サマに言われてしまったことだろう。実際のところ、俺には断る選択権もあったし給仕の為にメイドを雇う金銭もあったわけだが、俺の後見人だなんて言う面倒な仕事を引き受けてくれた恩も確かにあり彼の提案を否定することは出来なかった。

とどのつまり俺は六軒島とかいう右代宮家所有の島で暮らすしかなく、彼の家族に囲まれ不自由な生活を送る他ないということだ。願わくば平穏な日々を。もし叶えられ

ない望みならばせめて五体満足を――。

――――――

ある日、経済界にある噂が広まった。曰く、『あのマルソーの会長が養子をとった』と。最初は給仕との間に出来た子供を引き取っただと面白がっている者達が尾ヒレを付けていたが、その子供が創った企業が瞬く間に無視出来ないほどの大企業になるとその者達も嗤うことをやめ、その子供の出生について、会長との関係について血眼になり調べ始めた。

しかし分かったのは、養子が施設から引き取られたという事だけで。何故彼を引き取ったのか、何故経営手腕が老練な自分達よりも優れているのか、何故彼の企業が急成長を遂げたのか、その事については誰も何も掴めなかった。

だからこそ金蔵は青年となった少年を手元に置いておくことにしたのだった。彼から何かを学び取れないか、また彼は会長から何を継いだのか、それを見極める為に――。

第一話

右代宮家にお世話になって3ヶ月が経とうとしていた。この間に気づいたことについて記そうと思う。

まず第一に右代宮夫人は夫である金蔵氏に愛人がいるのではないかと疑っている。実際、彼が姿を消すことが稀にある。この島は彼が所有している島だからどんな事でも出来るのだろう、注意して意識を割いていてもいつの間にか消えていることがある。……唯一の心当たりとしては森の奥だろうか。彼処には近づかないようにと島に来た初めに忠告されている事からもあの奥に何かがあるのは確実だろう。問題は金蔵氏の目を盗んでどうやって森に入り込むかだが、まぁなるようになるだろう。

次に右代宮兄弟の仲の悪さだ。これについては遊び感覚で次期当主に相応しい人物かどうかで書いていきたい。

まず長男蔵臼は威厳がある態度を高圧的に接すれば身につけることが出来ると考えている節がある。そのため妹や弟に強く接しているが、あんなので威厳が身につくなら誰も苦労しないだろと言いたい。……いや、一度だけ言ったことがあるが聞き届ける気はなさそうだった。器量、そして自分の才を信じる強さがない見るところがない男、と

言った印象かな。

長女絵羽。彼女は才気もあり自分の能力についてもどの程度のものなのか自覚をしている。そこは評価できるがことある事に兄蔵臼に対抗するのは如何なものか。そこが無ければ次期当主に推したい人物だろう。まぁ次期当主に収まれば落ち着くとは思うんだが。

次に留弗夫……。彼は……スネ夫とかそんな感じの性格をしている。その場で一番権力を持っている人物に取り入るような男でその人物に好ましい言い回しをしたり機転が利く。……当主っていうよりは参謀とかそっちの方が合ってるんじゃないかなぁ？

そして最後に楼座。彼女は年の離れた末っ子ということもあり、ことある事に兄や姉に板挟みにされて虐められていた。俺が来てからめっきり無くなり感謝されたことがあるが、悪い気はしなかった。まぁしわ寄せは俺に来てる訳だが、気になるほどでもない。

とまぁ、長ったらしく書いてはみたがこの評価誰かが読んだりしないよな？読まれたら間違いなく殺される気がする。あっ、でも絵羽お義姉様に関してはいい事しか書いてないから何かあったら庇ってほしいな☆

そして今日はある計画――森の奥の金蔵氏の愛人を探す旅を実行する日である。この島は俺が住まわせてもらっている屋敷部分と船着場などを含めても島の1／3程しか使われていないと思わせるほど大きい。……つまりは残りの部分に金蔵氏の愛人なり妾なりが潜んでいたとして夫人はもちろん子供たちも気づけない仕組みになっているはずだ。

数週間をかけて源次さんや使用人の目を盗み集めた非常食や飲料水をリュックに詰め込み一路木々が鬱蒼と茂る森へと入っていった。

「……完全に迷った。マジで自分がどこにいるか分かんねぇ…詰んだな」

森に入りはや4時間。屋敷を抜け出したのは早朝だったにも関わらず今は太陽が煌々と照りつけている。…いや、太陽の位置で方角自体は分かるじゃねえか。

「あほらし。……もうちょい進んだら帰るか」

この選択が俺に一生涯の宝物を授けてくれたのだから運命なんて言うのはよほど気まぐれなんだと思う。

このあと30分ほど歩き続け、流石にどこかの木陰で休憩しようという所でその屋敷は目の前に現れた。表の屋敷よりは存在感がないが、愛人を囲うのが目的だとすればこれ以上無いほどの建物だろう。屋敷自体の高さも森に隠れるほどの大きさに抑えられ

ているが、離宮があったりするのは流石と言う他ないだろう。

「――どちら様でしょうか？」

そして屋敷の隠蔽工作に関心していた俺は少女の声を聞いた。声に気付き振り返ると金髪蒼眼に黒いドレスを纏った美しい女性が――

「あの？……こういう時はどう声をかけるのが正解なんでしょう？……うぅ、おと…金蔵に教えて貰ってないし……」

彼女に見蕩れていると俺の気分を害したと早合点し、わたわたと面白いほどに慌てる少女。正直彼女の百面相を見ているのも乙なものではあるが彼女の心象を悪くするのもうまくない。……初対面の相手にこんなに気を遣うなんていつ以来だろうか。

「すまない、キミが余りに綺麗だからつい見蕩れてしまった。許してくれるか？」

「きれっ……！」

思うままに彼女に伝えると可愛らしく赤面し両手で頬をおさえ照れてしまった。その仕草も最早愛おしく感じられてしまう。会ってまだ数分と経っていないはずなのに俺は彼女が――。

「あのっ！中でお茶でも如何ですか？……その、宜しければ」

「喜んで」

彼女の申し出を断る理由もそんな気すら無く、彼女に導かれるまま屋敷へと足を踏み

入れる。
　最近お茶を勉強しているという彼女が淹れてくれた紅茶は香りが良く、明らかにいい茶葉だとそういう事に疎い俺でも気付けた。目の前に紅茶が置かれ、彼女のお気に入りだと言うマドレーヌなどが茶請けとして数個頂いた。
「……うまい。紅茶淹れるの上手いんだね」
「頑張って練習しましたから。……私たちまだ自己紹介もしてないんですよね。不思議な感じです、名前も知らないのにこんなに居心地が良いなんて」
　カップを両手で持ち、そう穏やかに微笑む彼女。その仕草だけでもまるで絵画のようで俺はどうしようもなく彼女の虜になっていた。
「私は――ベアトリーチェ。ベアトリーチェと、そう呼ばれています」
「俺は圓山勇一。勇一って呼んでくれると嬉しい、かな」
「ユウイチ、ですね。分かりました。私もベアトリーチェと呼んでください」

　その後俺はベアトリーチェと名乗った少女と、とても有意義な時間を過ごすことが出来た。彼女が得る知識の殆どが本からという環境だったためか、俺が話す内容にも一々大きなリアクションを取ってくれて――いつも俺を出汁にしようとするオッサン共とは違い――純粋な彼女の心がどうにも眩しく、そして終始笑顔を絶やさない彼女の姿勢

が　とても好ましく映った。

だからだろうか、その日の夕方俺は彼女にプロポーズをしていた。出会って数時間しか経っていないというのに、俺は彼女を離したくなくなっていた。

「……やっぱり無理だよな、会って数時間で結婚しよう、なんてのは」

「いいえ、そんなことはありません。――私もきっと貴方を愛していますから」

嬉しいです、貴方と同じ気持ちになれて。……そう微笑を浮かべる彼女は本当に美しくて。

「……圓山様？」

いつの間にここに居たのか、熊沢に気付くことが遅れてしまったのである。